

カラマーゾフの世界

(A).兄弟たち、スメルジャコフを巡って

—スメルジャコフとマリアとアリョーシャ—

芦川 進一

はじめに

ライフ・ワークとして長い間取り組んできた『カラマーゾフの兄弟論』を書き終えてから三年余、その上梓から一年半が経った。しかし不覚にも(?)、これでカラマーゾフの世界と私の縁が切れたわけではなかった。目を閉じるとなおも鮮やかに心に浮かび上がる様々な場面、十分に考え切らなかった問題、新たに湧き出る謎、若い人たちから投げかけられる問い、拙著についての書評・・・この作品はなおも私の心に大きくのしかかり、その謎と魅力はますます大きくなってゆくように思われる。

そのような中で、この三年間、私は若い人たちとの対話に刺激されつつ、改めてこの作品が持つ様々な問題と取り組み、それらについて折につけデッサンを試みてきた。その一部は小さなエッセイとして一応の形を整え、既に河合文化教育研究所のホーム・ページ内に設けられた「ドストエフスキイ研究会便り(1)・(5)」として五回ほど掲載されたのであるが、なお新たなデッサンは増えつつある。

それらを読み返して改めて驚かされるのは、スメルジャコフが占める役割の大きさと重さである。若い頃から私は、この存在をカラマーゾフ世界のブラック・ホールとして課題とし、先のカラマーゾフ論でも正面から取り上げ、それなりの結論は出したつもりであった。だがこのブラック・ホールが他の主人公たちに投げかける影に、今もなお眼を釘付けにされている。それと共に私の心に大きな位置を占めるようになったのは、スメルジャコフを愛するマリアの存在である。彼女にも一度正面から焦点を当てる必要があると思われた。かくして自分が書き溜めたものの中から、改めてカラマーゾフ家の兄弟四人に関するものを選び、主にスメルジャコフとマリアとアリョーシャの関係に焦点を当て直し、この「ドストエフスキイ研究会便り」に毎月一回ずつ、(6)・(11)の六回の予定で掲載させて頂くことになった。なおタイトルの頭に(A)を付したのは、この連載の終了後にもなお(B)や(C)など、一連の様々な考察の掲載を予定してのことである。

さて河合文化教育研究所のホーム・ページが、また「ドストエフスキイ研究会便り」が目指すところは、既成のマスコミ・ジャーナリズムやアカデミズムからは距離を置き、日本の将来を担う若者たちが、ドストエフスキイを中心に直接古今を貫く一級の先哲の胸を借り、自由に試行(思考)錯誤を試みる場を創出することである。このささやかなドストエフスキイとの取り組みを、私の教え子たちを始め、これに触れて下さる方たちが少しでも自らの思索の手掛かりとして頂けるならば、私としてはこれにまさる喜びはない。

目次

はじめに

(A).兄弟たち、スメルジャコフを巡って —スメルジャコフとマリアとアリョーシャ—

- 第一回目.第1章. 疾走するマリア 【第十一篇10より】
- 第二回目.第2章. スメルジャコフの猫の葬式 【第三篇2より】
- 第三回目.第3章. イワンの「人生で最も卑劣なこと」 【第五篇6より】
- 第四回目.第4章. 噛み砕かれたアリョーシャの指 【第四篇3より】
- 第五回目.第5章. ドミートリイの裸形の荒野 【第八篇2より】
- 第六回目.第6章. スメルジャコフへの鎮魂歌 【第六篇3より】

凡例

- ★作品からの引用は、※アカデミア版30巻本全集(1972—1990)を用い、筆者自身が訳出した。その際、日本語訳のドストエフスキイ全集として※筑摩書房版(1962～1991)、※河出書房版(1969～1971)、※新潮社版(1978～1980)を参考とさせて頂いた。その他※江川卓訳(集英社世界文学全集、1979)も参考とさせて頂いた。
- ★聖書からの引用は、※ネストレーアールアント編、『ギリシャ語新約聖書』(27版、1993)、※ロシア聖書協会『我らが主 イエス キリスト 新約聖書』(1823)、※ロシア聖書協会「旧約聖書」(2011)、※B.H.ザハーロフ、B.Φ.モルチャーノフ編『ドストエフスキイの福音書 1850年1月トボリスクでドストエフスキイに贈与された1825年発行新約聖書の個人蔵書 [写真版]』(2010)、※佐藤研編訳『福音書共観表』、岩波書店(2005)、※日本聖書協会『舊約新約聖書』(文語訳)(1967)等を利用して頂いた。
- ★『カラマーゾフの兄弟』の作品の内容について言及・引用する時、例えば「第十一篇第9章」の場合は、括弧を用いて(十一9)のように示した。本論自体の内容について言及する時、例えば「第5章」の場合は、括弧内にそのまま(第5章)のように記した。聖書について言及・引用する時、例えば「マルコ福音書第五章第23節」の場合は、括弧を用いて(マルコ五23)のように記した。
- ★参考・参照文献は、その都度文中に括弧を用いて記した。
- ★ロシア語の重要語・概念については、例えば「^{イストレブリャーチ}絶滅させる」「^{ユローヂヴァヤ}宗教的痴愚」というように、適時カタカナでルビを付した。聖書のギリシア語についても同じである。

第1章. 疾走するマリア

[第十一篇 10 より]

第1章・目次

①. 逢瀬 ^{デート} まで	3-5 ページ
②. 逢瀬以降	5-8 ページ
③. 逢瀬の場で	9-13 ページ
④. スメルジャコフと聖書(1) — 「初子」への祝福—	13-17 ページ
⑤. スメルジャコフと聖書(2) — イエスへの呪詛—	17-20 ページ

スメルジャコフの自殺

真夜中の家畜追込町をマリアが必死で走り抜けてゆく(十一10)。マリア・コンラードチエヴナ。彼女はイワンが三度目で最後のスメルジャコフ訪問を終えて去った後(十一8)、サモワールを片付けようとして部屋に入り、「壁の釘にぶら下がった」婚約者スメルジャコフを発見するや、警察にも「誰にも知らせず」、このことを「真つ先に」アリョーシャに知らせるべく、夜の闇の中を「ずっと走り通しで」、彼の許に駆けつけようとしているのだ。

読者の心に鮮烈に刻まれる真夜中のマリアの疾走。彼女のこの姿に目を向けることから、『カラマーゾフの兄弟』のブラック・ホールとも言うべきスメルジャコフを理解する上で、またその異母兄弟たち三人、ドミートリイとイワンとアリョーシャについて考える上で、更にはこの作品の中心テーマを捉える上で、一つの突破口が開かれるように思われる。

この作品の特徴である複雑なドラマ展開のため、いきおい本論の叙述も話が前後し、繰り返しも多くなるが、まずは最初にマリアに関する情報を集めるよう努めたい(①、②)。そこから明らかになるのは、彼女のスメルジャコフに対するひた向きの愛情であり、殊に二人の逢瀬^{デート}に焦点を絞り込むことで(③)、「己の命を絶滅させる」(彼の遺書より、十一10)に至ったスメルジャコフという、この作品の最大の謎たる存在の内面も相当鮮明に浮き彫りになってくるであろう(④、⑤)。

①. 逢瀬^{デート}まで

マリアの帰郷

マリアとその母はカラマーゾフ家の隣家の住人である。「相当老朽化してはいたが、外観は心地よい」(三1)とされるカラマーゾフ家の屋敷と較べると、母娘の住まいは「古びて小さな傾きかけた家」であったとされる。筆者が伝えるラキーチンの情報によれば(三3)、マリアは首都ペテルスブルクで高官の家々を小間使いとして転々としていたのだが、一年ほど前、足が不自由で年老いた母が病気になったのを機に、故郷の家畜追込町に戻ったのである。この作品冒頭の第一篇と第二篇では、主人公たちが次々とそれぞれの目的を持って故郷の家畜追込町に帰って来る。筆者はそれらの帰郷について丁寧に筆を重ねた上で、「場

「違いな会合」と題された一つのクライマックスを現出させるのであるが、大きくはその流れの中にマリアの帰郷も位置づけられるであろう。

ところで一年ほど前の彼女の帰郷の頃には、出家の覚悟を決めたアリョーシャもまた、モスクワの養育者の許を去り、同じ家畜追込町に戻ったとされる。彼の帰郷の理由は亡き母の墓を探し出すことであった(一四)。ほぼ同時期の帰郷と、その直接の動機が共に母であったという事実。二人の心根について理解するために、これは筆者から提供されたささやかではあるが貴重な伏線的情報として、後の考察の手掛かりの一つとしよう。

マリアの帰郷について、また一年前に新たに始まった母娘二人の生活について、具体的な詳細が記されることは殆どない。だが恐らくは母の病のためであろう、筆者は母娘の生活は逼迫し、今ではその日の食べ物にさえ事欠く有り様となっていたと記す(三一)。屋敷内にある庭の空き地からは牧草が採れたが、その土地の賃貸料とても年に数ルーブリにしかならなかった。最近庭には菜園も作られたが、マリアは日々隣家のカラマーゾフ家を訪れては、下男グレゴリーイの妻マルファからパンやスープを分けて貰うようになっていた。これに対しマルファは嫌な顔ひとつ見せず、求めに応じてやるのだった。更に筆者によれば、このような極貧生活に陥りながらも、マリアは都会風の派手な身なりにこだわり続け、所有するドレスは一枚も手放そうとせず、その内の一つはやけに長い裳裾のついた青いドレスであったという。その派手な衣服の一つに身を包み、マリアは日々マルファの許を訪れていたであろう。

スープとスメルジャコフ

このマリアがいつの間にか、カラマーゾフ家の下男スメルジャコフと恋仲になったのである。彼はフォードルの私生児とされる青年で、マルファの夫グレゴリーイと共にカラマーゾフ家の料理番を務めていた。あるいは二人のなれ初めはスープが取り持つ縁であった可能性もあろう。勝手な推測は許されないが、スメルジャコフについて理解するためにも、このスープから見えて来るものをしばらく追ってみよう。

スメルジャコフの出生については後に繰り返し確認することになるが、成長するに従って、彼は極度の潔癖さを示し始める。つまりこの青年はスープを前にして、匙でその中を窺ったり、屈んで覗き込んだり、更には匙ですくっては光にかざしたりするようになったのである。この行動はスープに限らず、口に運ぶもの全てに及ぶようになり、遂に彼はあらゆる食べ物の一片をフォークで刺し、顕微鏡を覗き込むかのようにじっと見つめ、長い躊躇の末にようやく覚悟を決めてそれを呑み込むまでになったのだ。

育ての親のグレゴリーイとマルファからの報告を受けたフォードルは、直ちにスメルジャコフをモスクワへと送り出す。病院に送ったのではない。彼を料理人にするためである。筆者によれば、数年後に帰郷したスメルジャコフの相貌は大きく変わっていたという。顔の皺が増え、顔色は黄ばみ、すっかり老け込んで、去勢された男のようになっていたのだ。だが筆者によれば、スメルジャコフの内面はモスクワに出かける前も後も変わることはな

かったという。外見の変化とは対照的に、この青年は人嫌いであり続け、誰とも付き合いおもうとはせず、頑なに沈黙を守り通したのだ。大都会にも一向関心を示すことがなく、わずか一回だけ訪れた劇場でも、そこで示したのは不満だけであったという。

だが彼は一点、モスクワ風のお洒落には強い興味を示したのであった。帰郷した彼は、小ぎれいなフロックとシャツを身につけ、衣服には毎日二回念入りにブラシをかけ、仔牛のなめし皮の長靴も、イギリス製の靴墨で鏡のようにピカピカに光るまで磨き上げるのであった。彼は料理人としての腕には磨きをかけて帰ってきた。だがフォードルから支払われる給料のほとんど全額は、今や衣類やポマードや香水などに使われるようになっていた。人嫌いということでは、彼は男性と同じく女性をも軽蔑しているようであり、殊に女性たちには厳しい距離を保ち続けるのであった。

スメルジャコフの癲癇発作についても記しておこう。彼の癲癇発作は既にモスクワ行きの前から始まっていて、これがモスクワから帰った後にますます頻繁になったのである。そしてこの発作こそフォードル殺害において大きな役割を演じることになるであろう。そのことは措いて、スメルジャコフが発作で倒れた時、彼に代って料理を作るのはマルファであったが、筆者によれば、それは家長のフォードルの口には合わなかったという。フォードルが口にするのは専らスメルジャコフの料理であり、彼は魚のスープとピローグとコーヒーにかけては、この青年が名人であると太鼓判まで押すほどであった（三七）。マリアがマルファから日々分けてもらうパンやスープが、マルファの調理した夫婦用のものであったのか、あるいはスメルジャコフの手になるフォードル用のものであったのか、またスメルジャコフが発作を起こした時、マルファの許で安静にさせられる彼に対して、マリアはどのような配慮を見せたのか、これら具体的な点までは不明である。だが癲癇の発作にしてもスープにしても、作者は我々読者が、隣家の住人同志であるマリアやスメルジャコフの日常生活や日々の交流について、僅かながらでも推測することは許していると考えてよいであろう。

スメルジャコフの癲癇発作に戻ろう。先のスープから始まった、潔癖症とも言うべき食物への異常なこだわりに対して、フォードルは直ちにスメルジャコフにモスクワへの料理修行を命じたことは既に見た。このフォードルが、ますます頻繁化するスメルジャコフの癲癇発作と、この青年が示す人間嫌いと殊に女嫌いの一連の現象に対して、またも如何にも彼らしい診断を下したのである。「嫁でも貰ったらどうだ。世話をしようか？」（三六）。青ざめたスメルジャコフは、一言も答えなかったという。

これらのエピソードは全て、スメルジャコフの内面に分け入る強力な手掛かりを与えてくれるように思われる。殊に彼が口に入れるもの全てを光にかざし、じっと調べるようになったという事実は、この青年の内面を映し出す符牒として無視出来ないものであろう。またますます頻繁になってゆく癲癇発作について、更にはその極度の人嫌いと女嫌いについても、専らこれらを思春期の問題と診断したフォードルとはまた別の角度から、我々は我々で様々な考察への誘惑を感じざるを得ない。だがスメルジャコフについてのデータは

未だ十分には集まっていない。拙速は避け、本章の後半部と次回の第2章でこの存在についてのデータを更に多く集めることにしよう。我々の差し当たっての課題は、出来るだけマリアとスメルジャコフが生きていた日常に目を向けること、スープという身近な手掛かりを介して、二人の出会いから後半で検討する逢瀬^{デート}に至る背景を考えることであつた。

スープとマリアとスメルジャコフ。改めてこの視点から眺める時、上で確認してきたスメルジャコフに関する幾つかのエピソードとは、彼の内に蠢く闇を指し示す不吉な警告信号である一方、青春を生きる一青年としてのスメルジャコフ像を浮かび上がらせる重要な資料としても読み得ると考えるべきであろう。その点で、この若者が現わし始めた異常な兆候に対して、直ちに彼を料理人としての修業に送り出した、あるいは結婚を勧めたフォードルこそ、たとえ一面とは言え、事の本質を的確に掴んでいたと言えるかもしれないのだ。自殺に至るスメルジャコフの激しい内面のドラマを追うにあたり、我々はフォードルのリアリズムやマリアを介して見えてくるこの存在の、異常さや不吉さの裏に存在する繊細で、かつ平凡とも言うべき若者としての側面もまずは確認しておくべきであろう。

2. 逢瀬以降

カラマーゾフ家と隣接する庭外れの茂みの中には崩れかかった古い四阿があり、その近くにある塀の脇の木々の間には、これも古く背の低い緑色のベンチがあつた。いつの間にか二人はここで逢瀬を楽しむようになっていたのである(五2)。アリョーシャによって偶然目撃される二人の逢瀬。ここで筆者はスメルジャコフについて一つの決定的なデータを提供するのだが、このことは本章の後半(3・4・5)の主要テーマとして、我々はまずこの逢瀬の翌日から、二か月後のスメルジャコフの自殺に至るまでの経緯を、ここで簡単に辿っておくことにしたい。それらは『カラマーゾフの兄弟』の一方の核心部であり、簡単な要約とはいかないが、出来るだけマリアに沿う形で試みてみよう。

マリアがスメルジャコフとの逢瀬を楽しんだ翌日の夜のことだ。隣家の主フォードルが脳天を叩き割られる。癲癇発作の偽装の下に、スメルジャコフがフォードル殺害を決行したのである。だが彼の周到な準備により、父親殺しの犯人として逮捕されるのは長兄のドミートリイである。この殺害の事情や詳細については第3章や第6章で見よう。ちなみにこの時マリアはグレゴリーに依頼され、フォードル殺害の報を警察署長にもたすべく、夜の町に駆け出したのであつた。スメルジャコフが脳天を叩き割ったフォードル。そして二か月後、壁に首を吊った当のスメルジャコフ。マリアとは恐るべき死の報知を持って二度も家畜追込町の夜の闇を走り抜けるという、悲しい伝令としての運命を担わされた女性である。

さてスメルジャコフが偽装した癲癇発作は、血の一線を踏み越えた衝撃によって、直ちに激烈な真正の発作に移行する(九2、十一8)。病院に運び込まれたものの、予後が悪く衰弱した彼は、ほぼ半月ほど後のことだが、マリアの「婚約者」として彼女の許に引き取ら

れる。彼女はその母親と共に、以前住んでいたカラマーゾフ家の隣から、別の住まいに移っていたのだ(十一8)。カラマーゾフ家の隣にあった以前の家は「古びて小さな傾きかけた家」とされるのに対し、この新しい住まいは「玄関の間で二つの住まいに仕切られた、傾きかけた丸太造りの小さな家」とされる。二つの家は共に「傾きかけた」「小さな家」とされるものの、赤貧の母娘が何故また如何にして以前の住まいを売り払って新たな住まいに引っ越しをしたのか、またそれが極めて短期間の内に如何にして可能となったのか、これらの具体的な事情は不明である。また母娘二人は共に、スメルジャコフを「非常に尊敬し」「自分たちよりも偉い人」だと思っていたとされる(十一7)。たとえそうだとすると、またこの「婚約」が形だけのものであったとしても、果たしてそれが何時如何なる事情の下になされたのか、これもまた不明である。

引っ越しにしても、婚約にしても、事はいささか不可解で急な展開と言うしかないのだが、この経緯について筆者は具体的には何も記さない。全ては愛する人の危機を前にしたマリアの愛情のなせることなのか。去勢派のような相貌となってモスクワから帰ったスメルジャコフから判断して、またその他の手掛かりを基に、彼やマリア母娘三人が何らかの教団セクトに所属していたと考えるべきなのか。あるいはそこにはアリョーシャのマリアに対する密かな支援があったのか。つまりこの後で見ると、偶然恋人たちの逢瀬に居合わせてしまったアリョーシャが、二人のために様々な配慮をした結果であるのか。我々は最後の可能性が高いと考えたいが、テキスト自体からの直接的な証明は難しい。この問題については本論の課題の一つとして結論を急がず、第2章から第6章までの考察と並行して考えてゆくことにしよう。

さてマリアの庇護の下にあるスメルジャコフのその後の動静であるが、筆者は彼の最終的な自死に至るまで、時に極めてそっけなく暗示的に、また時に極めて詳細に、我々読者に情報を与え続ける。これらについても次章以降繰り返し検討してゆこう。そこにあるのはスメルジャコフの自死に至る壮絶で悲劇的なドラマであるが、今ここで一つだけ確認しておくべきは、スメルジャコフがマリアとの逢瀬の翌日に父親殺しを決行してから、彼女の許での自死に至るまで、約二か月間の全過程を通じて、一貫してこの恋人によって献身的に庇護され介護され続けるという事実である(十一6以下)。またイワンがスメルジャコフを病院に訪問する時、この病人は自分を毎日「親切な人々」が訪れてくれるとも語るであろう(十一6)。マリアを始めとしてスメルジャコフに心を寄り添わせる「親切な人々」の存在。当のスメルジャコフが漏らすこの情報は、いくら注意してもし過ぎることのないものとして心に留めておこう。

イワンのスメルジャコフ訪問

スメルジャコフの入院中から死に至るまで、彼の許を三度にわたり訪れ、熾烈な対決を繰り広げるのが異母兄弟のイワンだ(十一6、7、8)。この訪問は『カラマーゾフの兄弟』後半のクライマックスの一つであり、それらを描くドストエフスキイの筆は圧巻と言う他

ない。我々もマリアとの関係に限定してではあるが、幾つかの事実に注目しておこう。

先に見た病院への初めての訪問から二週間ほどが経ち、イワンが母娘宅に引き取られたスメルジャコフの許を訪れた時のことである(十一7)。マリアの「婚約者」スメルジャコフは既にすっかり健康を回復し、気力も充実し、恐らくその生命力の最後の絶頂期とも言うべき時期にあった。彼の部屋はタイル張りの暖炉によってひどく熱され、また壁にはきれいな青い壁紙が張られていたのだが、それらは至る所が破れ、その裂け目を恐ろしい数のゴキブリが這い回っているのだった。イワンを驚かせたこの悍ましい光景も、新しく張られた壁紙の色はマリア好みの青であり、熱すぎる暖房も「婚約者」の健康に対するマリアの気遣いのなせる業だと取れば、決してただ悍ましい光景とは言えないであろう。この二度目の訪問の内容については、次回以降に検討しよう。

それから一か月ほど後のことである。冒頭で言及したように、イワンが三度目で最後のスメルジャコフ訪問をする(十一8)。この一か月の間にスメルジャコフには決定的な変化が起こっていた。顔はやつれ果てて黄ばみ、目は落ち窪み、下の脛は青ずんでいた。死相とも言うべき相貌が現われていたのである。最終的な発狂を予想する医者もいた。訪れたイワンに対してマリアは、既にスメルジャコフの健康が危機的な段階に差し掛かっていること、そればかりか精神も「ほとんど正気ではない」状態にあることを告げ、哀願するのであった。「あまり長くお話にならないで下さい」。マリアが「壁の釘にぶら下がった」スメルジャコフを発見するのは、イワンが帰った直後のことである(十一10)。

三度にわたるイワンの訪問。その背後でスメルジャコフの内には一体何が起こっていたのか。このことについて筆者はストレートには記さず、その筆は雄勁かつ的確でありつつも、飽くまでも深く暗示的である。この問題は『カラマーゾフの兄弟』が秘める最大の謎の一つであり、我々読者が様々な角度からアプローチを試みる事が要求されていると考えるべきであろう。そしてこれこそ本論の主要な課題に他ならない。

最後に改めて一つだけ確認しておこう。それはこのイワンの訪問と並行して進展するスメルジャコフの変貌、死に至るドラマの全行程を通じて、彼の傍らには常に彼のことを気遣うマリアの存在があるということだ。

スメルジャコフに愛情を捧げるマリアについては、これで見ればきものはほぼ見た。次に我々は一時措いておいた場面、マリアとスメルジャコフとの逢瀬の検討に進むことにしよう。アリョーシャが偶然居合わせてしまうこの二人の逢瀬こそ、ユーモアとグロテスクさと微笑ましさが混在する外見の下に、『カラマーゾフの兄弟』の中核的な問題が提示される場、つまりスメルジャコフが最深奥に置く闇が浮き彫りにされ、彼とマリアとの関係、そしてアリョーシャとの関係が新たに生まれる場として、我々は最大限の注意を以って取り組まねばならない。

3. ^{デート}逢瀬の場で

緑色のベンチで

マリアとスメルジャコフ。二人の逢瀬の場面に焦点を絞ろう。スメルジャコフの死から二か月ほど前、夏の終わりの頃である。先に確認したように、既に家畜追込町には主人公たち全員が揃い、それぞれの内に蓄えられたエネルギーは最高潮に達しようとしていた。家長フォードルと長男ドミートリイとの諍い、金と女を巡る骨肉相食む争いの仲介を求めて、町の郊外にある修道院のゾシマ長老の許には、下男であるスメルジャコフを除き、カラマーゾフ家の全員が集結する。この「場違いな会合」(第二篇のタイトル)が開かれた翌日の夜には、ゾシマ長老がこの世を去り、その翌日の夜にはフォードルが殺害される。『カラマーゾフの兄弟』前半のクライマックス、相次ぐ二人の死である。

「場違いな会合」で師ゾシマが予見した悲劇。イワンの言う「二匹の蛇の食い合い」(三九)の悲劇を未然に防ぐべく、翌日アリョーシャはドミートリイを一刻も早く見つけ出そうと、前日兄と出会った隣家の四阿に忍び込む(五二)。すると近くの塀の脇、木々の間にある古い緑色のベンチの方から突然ギターを爪弾く音が響き、それに合わせて男の甘ったるい唄声が聞こえてくる。裏声で俗謡を唄うスメルジャコフの声だ。相手はマリアらしい。

「抗い難き力もて
 魅かれゆく、我は、愛しき人に
 主よ、憐れみ給え
 かの人と、我を！
 かの人と、我を！
 かの人と、我を！」(五二)

続いてアリョーシャの耳に響いてきたのは、やはりマリアの声であった。「どうして、あなたは私の方に長いこと、おいでにならないの。パーヴェル・フォードロヴィチ。どうして、あなたはいつも私たちのこと、軽蔑なさるの?」。「そんなことはありませんです」。筆者は、女性の方には「媚びる」ような調子が、男性の方には「礼儀正しさ」の中にも「堅忍不拔な威厳」が漂っていたと記す。この会話だけからも、スメルジャコフがマリア母娘の住まいを時に訪問し、三人の間に交流があったこと、母娘がこの青年の訪問を待ち望んでいたことが覗われよう。そればかりでない。作者ドストエフスキイのユーモア漂うリアリズムによって我々は、二人が交わすぎこちなくも甘い会話について、またスメルジャコフがマリアに聴かせるギターの弾き唄いと、その俗謡の思わせぶりの歌詞について、ついつい深追いに誘われてしまいそうである。事実ここに引用した歌詞は、死の彼方に去ったスメルジャコフを向こうに置く時、ただの俗謡の歌詞であることを止め、薄幸な二人の恋人への憐みを誘う奥行きを以って響き始めもするのだ。だが我々はこのテーマは措いて、

恋する二人を四阿から伺うことを余儀なくされたアリョーシャに注意を移そう。

アリョーシャの観察によれば、「まだ若く器量も満更ではないものの、ひどく丸顔でそばかすだらけ」のマリアはこの時、なんと庭の端にある茂みの中で、例の長い裳裾のついた青いドレスを身に纏っているのだった。一方スメルジャコフはと言えば、鑊で縮らせたと見える髪をポマードで塗り固め、茂みの中でエナメルこての牛革の長靴まで履いている。アリョーシャが目撃したのは逢瀬に陶然とするマリア、つまりスメルジャコフに首ったけのマリアであり、またこのマリアに対し素っ気ない素振りを示しはするものの、決して満更でもないスメルジャコフの姿だったのである。

庭の奥の茂みに残る古い緑色のベンチ。そこで繰り広げられる両都帰りのハイカラな若い男女の、一張羅を身に着けての逢瀬。この時アリョーシャが何を感じていたのか、筆者は記さない。だが最大限に注意すべきは、ギターの伴奏がつけられた小唄の合間、二人の間で交わされた会話の一部である。甘たれてしなだれかかるマリアを相手に、素っ気ない態度の中からスメルジャコフがふと口にしたこと、それは彼自身の心の最深奥ばかりか、『カラマーゾフの兄弟』全篇の底に潜む闇を抉り出す恐るべき言葉と言うべきものである。

スメルジャコフの闇

まずその言葉が発されるまでの会話の流れを、マリアとスメルジャコフとの純朴な愛情について理解するためにも、もう少し追っておこう。

スメルジャコフの小唄の一節が持つ響きについて、マリアは感に堪えないという面持ちで語り始める。あなたが前に唄ってくれた時の方がもっと「優しい響き」がした。自分は詩が「大好き」なのだ。このマリアの言葉を、スメルジャコフは冷たく突き放す。韻を踏む詩など「実用的ではありません」。マリアの声はますます甘えたものとなり、スメルジャコフの頭の良さと知識の豊かさが誉めそやされる。くすぐられた虚栄心に後押しをされたこともあるのだろう。スメルジャコフの内から突如噴き出してきたのは、驚くべき激しい言葉であった。

「もし幼い頃から、私の運命がこんなものでなかったなら、私はもっと色々なことが出来たでしょうし、もっと色々なことも知ったでしょうに。もし私がスメルジャシチャヤ[臭う女]から生まれた父なし子だから、卑劣漢だなどと言う奴がいるならば、私は決闘の場へ出て、そいつをピストルで撃ち殺してやるでしょう。モスクワでさえ、面と向かってそんなことを言う奴らがいました。グレゴリーイ・ワシーリエヴィチのせいで、ここから噂が伝わったのです。グレゴリーイ・ワシーリエヴィチは、私が出生に対して叛旗を翻していると叱るのです。《お前は、母の胎を開いたのだ》と言って。この世にまるっきり生まれて来ないで済むのだったら、私はまだ胎内にいるうちに自殺してしまいたかったです」(五二)

自らの出自と運命に対する激しい呪詛。続いてスメルジャコフが表明するのはロシア農民とロシアに対する強い嫌悪と軽蔑、そして異母兄弟イワンとドミートリイに対する激しい反感である。これらについてはすぐ後で見よう。

スメルジャコフとはカラマーゾフ家の家長フョードルが、冬も裸同然の姿で街をさ迷い歩く知恵遅れの乞食女、^{ユローヂヴァキ}宗教的痴愚のスメルジャシチャヤに生ませた私生児とされる(彼女は子供を生んだその夜の明け方に死ぬ)。この世に生まれ落ちるや直ちに、彼はカラマーゾフ家の下男グレゴリーとマルファ夫婦に引き取られ、成長すると料理番の下男として父の下に仕え、グレゴリーの言葉では「おおよそ感謝の心を知らず」「片隅から世を伺う」「人見知りの激しい」少年、筆者の言葉では「傲慢で」「人間全てを軽蔑する」かのような若者となっていくのである(三七)。

スメルジャコフについて、その内面を伺わせるべく作者ドストエフスキイが読者に示す最短の、しかも最大の符牒とも言うべきものは彼の名前であろう。パーヴェル・フョードロヴィチ・スメルジャコフ。洗礼名パーヴェルは、グレゴリーが新約聖書の聖パウロから採って与えたものである。父称のフョードロヴィチは、父と目されるフョードルに因んで誰が言うともなくこう呼ばれるようになったものだが、フョードルは自分が父親であることは否定しつつも、この名称自体は面白がっていたという。苗字のスメルジャコフ。これは他ならぬフョードル自身が、母の綽名のスメルジャシチャヤからこう名付けたものとされる(三二)。既に名前そのものに、この青年が背負わされた運命の理不尽さと醜悪さが刻印されてしまっていると言うべきであろう。このような名を与えられた人間が、如何にこの世に生き、如何に人と対し得るというのか。

唯一の例外は洗礼名のパーヴェルである。この洗礼名が持つ象徴性について、後の考察の土台とするためにも、この名を与えたグレゴリーに目を向けておこう。

^{スメリヤノニエ・プリローヂイ}「自然界の混乱」

二十年あまり前のことだ。グレゴリー夫妻に赤ん坊が授けられる。だがそれは先天性の障害(六本の指)を持つ子であった。イスラエルを罵り、ダビデとその家臣団に滅ぼされたペリシテの(六本指の)巨人を思わせる赤子の誕生である(歴代誌・上、二十四・8)。この子の誕生後、三日間ひとり押し黙って裏庭の菜園を耕していたグレゴリーは、洗礼授与の時が来ると司祭に対し、この赤ん坊に洗礼を与えることを拒否する。「^{ドラゴン}竜です」。「自然界の混乱が起こったので・・・」。赤ん坊は二週間後に世を去る。この子を小さな棺に入れてやったグレゴリーは、深い悲しみの内にその死に顔を見つめ、墓穴に土がかけられるや墓前に^{ひざまず}跪き、地面に額をつけるようにして祈っていたという(三二)。

その真夜中のことだ。乞食女スメルジャシチャヤがフョードル邸の高塀を乗り越え、庭の湯殿で赤ん坊を産み落として死ぬという醜聞が生じる。ところがグレゴリーはこの子を抱き上げ、住まいに連れて来ると妻を座らせ、膝の上に載せた赤ん坊を胸に押しつけるようにしてこう語ったという。

「^{みなしご}孤児というものは神さまの子だ。誰にとっても身内だ。俺たちにとってはなおさらのことだ。これは俺たちの死んだ赤ん坊が送ってくれたのだ。これは悪魔の息子と信心深い女とから生まれたのだ。育ててやるんだ。これからは泣くな」

(三二)

『カラマーゾフの兄弟』の登場人物たちが表現する、最も感動的な言葉の中の一つだ。グレゴリーは、この世で名さえ与えられることなく薄幸な生を終えた自分たちの赤ん坊に代って、新たに神と亡き赤ん坊とから送られた子に、聖パウロから採ったパーヴェルという洗礼名を与えてやったのである。新約聖書の使徒行伝とパウロ書簡から浮かび上がるパウロ像との対比による、この名前が持つ象徴性について、言葉にするのは容易でない。この後第2章から第6章までの本論で、スメルジャコフの生と死の検討をしつつ取り組むべき課題としよう。

罪なくして涙する幼な子

さて次回第2章以降で見ると、カラマーゾフ家の兄弟四人の中で、この地上世界を支配する不条理、罪なくして涙する幼な子の受難という現実を目を釘付けにされ、「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」の中で、地上世界における神の存在を否定し、更には神と「キリストの愛」を天上に追放するのはイワンである。だが「罪なくして涙する幼な子」の運命を生きるべくこの地上に投げ出されたのは、そのイワンの足元にいる異母兄弟、下男として生きるスメルジャコフその人に他ならないと言えよう。スメルジャコフばかりか当然のイワン自身も、そしてアリョーシャやドミートリイもまた、ごく幼い内にそれぞれの母親に先立たれ、父親フョードルからは「忘れられ、棄て去られた」という点で、彼らも皆それぞれに悲劇的運命を定められた「^{みなしご}孤児」たちなのだ。『カラマーゾフの兄弟』とは、これら四人の兄弟がそれぞれの悲劇的逆境の中から如何に人間と世界とその歴史を捉え、如何にそれらと向き合うに至るか、更に言い換えれば、この地上で如何に自らの真の母と父を見出し、生命の真の根源たる神を見出してゆくか、あるいは悪魔に身を売り挫折するか、試行錯誤の実験報告書とも言い得るであろう。

アリョーシャを傍らに、緑色のベンチでマリアに向かって語り出されたスメルジャコフの言葉とは、カラマーゾフの兄弟四人が担わされた悲劇的運命を否定的に象徴し表現すると共に、何よりもこの悲劇的存在の最たるスメルジャコフが、自らの運命に対して抱くに至った「否」、呪詛と悪魔的叛逆の心を表わす言葉として、読者の胸に突き刺さる刃とも言うべきものである。

更なる呪詛とマリア

さてマリアに対して発せられたスメルジャコフの言葉は、続いて自らの祖国ロシアとロ

シア農民への軽蔑と呪いの表出に進み、更には異母兄弟であり若旦那であるイワンとドミートリイへの痛烈な弾劾の悪罵にまで及ぶ。つまりスメルジャコフは、イワンが自分のことを「悪臭漂う下男」であり、今にも「謀反」を起こしかねない奴だと語ったとして指弾するばかりか、ドミートリイについても、品行も、頭の程度も、懐の中身も、どこの下男にも劣らず「空っぽ」であるくせに、皆から尊敬されるとして血祭りに上げるのである。

自らの運命に対して、育ての親グレゴリーイに対して、ロシアに対して、そして若旦那たる二人の兄弟に対して向けられる痛烈な弾劾と呪いの言葉。それは正にイワンと同じ「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」の噴出に他ならない。だが MARIA はこれらを決して正面から受け止めることはない。彼女にはこれら痛烈な弾劾と呪いが、愛する男性の甘美な囁きとしてしか響かないかのようであり、正に柳に風の風情で受け流し、陶然と彼の傍らに寄り添い続ける。スメルジャコフはスメルジャコフで、MARIA に対して決して不満そうな気配を示すでもなく、再びギターを爪弾きながら得意の唄声を響かせるのであった。

4. スメルジャコフと聖書(1) — 「^{ういご}初子」への祝福—

歪められた聖書

二人の逢瀬自体の追跡は以上までとしよう。我々はここで先に引用した、MARIA に向けて語られたスメルジャコフの言葉、その最後の部分に存在する聖書的磁場の言葉二つについて、改めて検討しておかなければならない。イワンから「悪臭漂う下男」と呼ばれるスメルジャコフが、実は若旦那イワンに劣らず如何に深い聖書知識を持ち、またその聖書的磁場の内で如何に屈折した複雑な思索をする人物であるかが明らかとなるであろう。

まずは次の部分である。

「グレゴリーイ・ワシーリエヴィチは、私が出生に対して叛旗を翻していると叱るのです。《お前は、母の胎を開いたのだ》と言って」(五2)

スメルジャコフが、イワンにとって「謀叛」を起こしかねない奴、グレゴリーイにとっても「叛旗を翻す」人物として映っていることに注意すべきであろう。だがこのこととの関連で更に注意すべきは、「母の胎を開いた」という表現である。スメルジャコフがルカ福音書から採ったこの表現とは、本来福音書のどのような文脈にあるものなのか。

ルカ福音書は、ヨセフとMARIA 夫婦が、毎年過越祭に息子のイエスを連れてエルサレムに上るのを常としていたと記し、イエスが十二歳の時のエピソードを報告する(ルカ二4・52)。詳細は省くが、その背景としてあるのは、ユダヤ民族がモーゼに率いられてエジプトを脱出した時以来(この祝いが過越祭である)、ユダヤ人夫婦に与えられた「初子」たる男子は神に捧げられるべきものとされ、エルサレムの神殿詣でが定められていたという事実

である(出エジプト記十三2,12,15等)。この事情をルカは次のように記す。

「主の律法に次のように書いてある通りである、《母の胎を開くすべての男の子は、主にとって聖なる者と呼ばれるであろう》」(ルカ二23)

このルカ福音書を、より正確に言えばこれを用いたグレゴリーの言葉を、スメルジャコフは大きく歪めてマリアに語っているのだ。上で確認したように、ルカの文脈において「母の胎を開く」とは、やがて成長して神に捧げられる「聖なる者」たるべき、ユダヤの長子誕生を^{ことば}寿ぐ表現、つまり本来は神からの祝福を表現するものである。また先にも見たように、そしてこれからも繰り返し見てゆくように、グレゴリーとその妻マルファのスメルジャコフに対する姿勢は、その誕生時以来一貫して深い愛情に満ちたものである。つまり夫婦はこの子を、神と亡くなった彼らの息子から送られた「初子」として大切にしこそすれ、どこにも彼に対する悪意や敵意を見出すことなど出来ないのである。そしてこのことはスメルジャコフ自身も十分に知っていたのだ。病院を訪ねたイワンが必要なものはないかと尋ねると、彼は言う。「マルファ・イグナーチエプナが私を忘れずにいてくれて、必要なものが何かあれば、今まで通り親切に色々と助けてくれます」(十一6)。また育ての親について、再度彼はイワンに語るであろう。「あの人たちは、私が正に生まれ落ちてから常に優しくしてくれたのです」(十一8)。マルファと共に自分を育ててくれたグレゴリーの粗暴さと不器用さと無教養の内に、スメルジャコフが自分に向けられた深い愛情を感じ取っていなかったと誰が言えよう。

このグレゴリーが「お前は、母の胎を開いたのだ」というルカの聖句を挙げて、スメルジャコフが「出生に対して叛旗を翻している」と叱る」ことがあったとするならば、それはいつの間にかスメルジャコフの内に育くまれつつある悪魔の心、自らの運命に対する呪詛と叛逆の心に気づいたグレゴリーの内から湧き出た、怒りと絶望と悲しみに満ちた不器用で粗暴な愛の叱責でこそあれ、決して単なる軽蔑や嫌悪からなされた叱責などではなかったと考えるべきであろう。これから明らかとなってゆくが、スメルジャコフの聖書知識は並大抵のものではない。彼が聖書の表現について、またそれを用いたグレゴリーの真意について無知だったと考えることはまず不可能である。ここにあるのはスメルジャコフの意図的な話の歪曲である。

更にスメルジャコフはマリアに対して、モスクワでの料理修行中、自分のことを「スメルジャシチャヤから生まれた父なし子だから、卑劣漢だなどと言う奴ら」が存在していたことを告げ、それはグレゴリーが噂を流したからだとも言う。だがこれもまた彼の意図的な話の歪曲であろう。スメルジャコフの料理修行にあたり、グレゴリーが誰かに彼の出生について語ることがあったとしても、またその語り口自体は粗暴で不器用なものであったとしても、夫婦で手塩にかけて育てた子を貶める意図など決してなかったことは、スメルジャコフ自身が一番よく承知しているはずなのだ。ここに我々が読むべきは、グレゴ

ーリイに対してスメルジャコフが抱いた憎悪などでなく、むしろ複雑に屈折した愛情の心理劇であろう。

グレゴリーイとスメルジャコフ

次回第2章で見るように、密かに猫を殺しては葬式遊びをするような少年となり、次第しだいに暗く歪な心を現わし出してゆくスメルジャコフに心を痛めるグレゴリーイは、この子に文字を教え、更には聖書を用いての教育さえ始める。十二歳の頃である(三六)。もしスメルジャコフを「叱る」グレゴリーイがいるとすれば、それはこの教育の延長線上にある叱責であり、ここにはルカの聖句を踏まえ、青年となったスメルジャコフに対して、神から「聖なる者」たるべく命じられた「初子」としての自覚と矜持を持つことを改めて迫るグレゴリーイがいると考えるのが自然であろう。

ところで一日の内に立て続けに体験させられた二人の赤ん坊の死と生。耐え難い、また信じ難い生の悲劇、「自然界の混乱」に直面させられたグレゴリーイは、筆者によればこの「墓場の時」以来、「神さまのこと」を学ぶようになったという(三一)。彼が手に取ったのは『殉教者列伝』や『ヨブ記』、そして『シリアの聖イサクの苦行説教集』などの書物であった。筆者はグレゴリーイが、中でも聖イサクの説教集を何年にもわたり根気よく読み続けていたと記す。聖イサクの教えの核心とは、人間が犯す如何なる大罪も神の愛を凌ぐことは出来ないという、神の絶対愛の提示であるが、グレゴリーイにはその内容を何一つとして理解出来なかったという。だが、と筆者は記す。だからこそグレゴリーイはこの書物を最も大切なものとし、愛読もしたのだと。グレゴリーイは既にそこに記された神の真実を知り、確信もしていたのだ。

「孤児というものは神さまの子だ」「育ててやるんだ。これからは泣くな」。他ならぬ神からさえ言語道断の試練に投げ入れられること、「墓場の時」を迫られること。それがこの地上における人間の生であり、その「自然界の混乱」、言語道断の絶望の底でも悪魔に身を委ねず、神と人間への愛を貫き通すこと、そこに初めて真実も現れ出るという『ヨブ記』が説き、また聖イサクが繰り返し説く「試練の逆説」をグレゴリーイは黙って生きていたのである。アリョーシャに対してと同じくゾシマ長老が未来を託したのは、このグレゴリーイ夫妻やマリアのような「親切な人々」、信仰の究極の逆説を自然に巧まず生きるロシア民衆の聖性と「実行的な愛」に他ならない(六三E)。再度記しておこう。マルファと共に自分を育ててくれたグレゴリーイの粗暴さと不器用さと無教養の内に、自分に聖パウロから採ったパーヴェルという洗礼名を与えてくれた育ての親の内に、スメルジャコフが自分に向けられた愛を感じ取っていなかったと誰が言えよう。

反抗の逆説

知恵遅れの「ちびっこ」、「臭う女」と呼ばれる乞食女がある晩、名だたる好色漢で破廉恥漢のフォードルによって弄ばれ、この世に産み落とされた「初子」。成長と共に、世間の

噂からも明らかになってゆく自らの出生の秘密。そして自らに与えられた侮辱的な名前。言語道断の残酷で醜悪な運命を決して赦さないスメルジャコフは、マルファと共にグレゴリーが自分に愛情を注ぐ存在であることを知れば知るほど、また無教養で愚直で不器用な彼の言葉が、表面的な粗暴さの裏に深い愛を隠し持つものであることを理解すればするほど、それを正面から受け入れることを頑なに拒み、彼の言葉を悪意に満ちた醜悪なものに意図的に捻じ曲げ、嘲笑的な態度を以って応えた我々は考えたい。つまりこの育ての親に対するスメルジャコフの執拗で頑なな反抗的姿勢とは、むしろ彼自身の愛情の歪んだ逆説的表出だと取ることさえ可能なのだ。

スメルジャコフが見据えるもの

そうだとするならば、我々の前には「出生に対して叛旗を翻す」青年スメルジャコフの複雑に屈折した心理が浮かび上がってくるであろう。つまり自らの出生と運命に対する憎悪と復讐と懐疑。それと裏返しにある育ての親が一貫して示す愛情の感受。またそれに対する自らの愛情の歪んだ表出。これらが交錯した複雑この上ない心理である。

成長するに従ってスメルジャコフが示し始めた極度の潔癖さ。靴をこれでもか、これでもかとはばかりに磨き上げる姿。スープに限らず、口に運ぶもの全てをフォークで刺し、じっと見つめる姿。これら異様とも見える姿は、単なる精神異常の兆候として片づけるべきものではなく、この地上のありとあらゆるもの一切の清澄透明と神聖と愛を疑い、自らその真偽を試みようとする若者の、悲劇的心理の表出として考えるべきものであろう。我々が本論を通じての課題とした頻発する癲癇発作にしても、そしてまた極度の人間嫌いにしても、このようなベクトルで見て初めて納得のゆく現象として心に収まるように思われる。

だが早急な結論は控えよう。スメルジャコフが向き合うのはグレゴリーばかりでない。彼がなお見据えるのは父のフォードルであり、更にマリアとの会話から明らかとなったように、異母兄弟たちであり、世の人間であり、祖国ロシアであり、そしてイエスと神であることを忘れてはならない。

かくして長い裳裾のついた一張羅の青いドレスを身に纏うマリアとの逢瀬に、鍔で縮らせた髪をポマードで塗り固め、エナメル製の牛革の長靴を履いて現れたスメルジャコフの姿から、ただ単にモスクワ帰りの田舎下男の気取りのみを見たり、また育ての親への激しい呪詛から、不条理で醜悪な運命への復讐心のみを認めたりすることで、その干乾びた悪魔的な心を思い描くとするならば、我々はこの存在の心の奥に蠢く自らの出自への怒りと悲しみ、そしてまた彼の内に息づく愛への希求と葛藤を見過ごし、また地上のありとあらゆるもの一切の真実を問う思索家、悲劇的「観照者」(第2章)スメルジャコフの姿を見過ごし、自らの心の貧困と偏狭さを証するだけとなる。この青年の心の闇は奥深いのだ。

「母の胎」を「開く」か「切り裂く」か、和訳の問題

ところでグレゴリーが引いたルカ福音書の「母の胎を開く」という表現であるが、こ

の日本語訳について一つ疑問を提示しておきたい。先に見たように「母の胎を開く」とは、本来ユダヤの民にとり、夫婦に与えられた神の「初子」への祝福を示す表現である。これを『カラマーゾフの兄弟』の日本語訳の多くは「切り裂く」と訳出している。「開く」というギリシア語($\delta\iota\alpha\lambda\upsilon\omicron\lambda\gamma\omega$)に対応するロシア語($\text{p a z v e p z a t b}$ 不完了体、完了体は $\text{p a z v e p z n y t b}$)が、「広く開く、開ける、割る」から「切り裂く」という意味も持ち得るため、これを前面に押し出した結果と考えられる。スメルジャコフの誕生が「母の胎を切り裂く」蝮の子の誕生と重ねられ、この青年の悪魔性を表現する上で格好の訳語と考えられたのであろう。あるいはどこかに出典があるとしても、ギリシア語の新約聖書とドストエフスキイが用いた聖書からは逸脱した訳語と言うべきであろう。

いずれにせよこの訳語はスメルジャコフとの関係で、グレゴリーをただ否定的なイメージの内に閉じ込めてしまうという致命的な誤解に繋がるように思われる。つまりこの「切り裂く」という訳語では、育ての子を悪罵するだけの無教養で頑固で粗暴な下男という否定的なイメージのみがグレゴリーに付与されてしまい、彼がスメルジャコフの内から現れ出る悪魔性を前にしても、何よりもまずは彼を神から恵まれた「初子」として祝福する心、妻と共に彼に向け続ける強く深い愛情が読み取られないことになってしまうであろう。つまりグレゴリーにとりスメルジャコフの誕生とは、「母の胎を切り裂く」蝮の子の誕生のように、ただ悲劇的かつ悪魔的な忌まわしい出来事、彼自身の言葉で言えば「自然界の混乱」以外の何物でもなかったことになり、二人の間に存在する愛憎の葛藤、その複雑な心理劇が見落とされてしまうのではなかろうか。

先に見たように、グレゴリーが庭の風呂場で乞食女スメルジャシチャヤが自らの命と引き換えに産み落としたスメルジャコフを、神と亡き赤ん坊とから送られた子として、妻のマルファと共に受け容れる『カラマーゾフの兄弟』の中でも最も心打つ場面の一つは、この訳語によって殆ど帳消しになってしまうであろう。ドストエフスキイが描く人物たちの言動の背後に展開する超越的聖書の磁場での思索とドラマ、その聖と俗の「二重構造」に常に目を向けることの必要が改めて浮かび上がる。

5. スメルジャコフと聖書(2) —イエスへの呪詛—

イエスへの叛旗、そして「神と生命への呪い」

次に検討すべきは、スメルジャコフがマリアに向かって発したもう一つの衝撃的な言葉である。

「この世にまるっきり生まれて来ないで済むのだったら、私はまだ胎内にいるうちに自殺してしまいたかったです」(五2)

この世に生を受けた人間が発する言葉として、これ以上痛ましいものが他にどれだけあ

ろうか。『カラマーゾフの兄弟』全篇の中でも、恐らくはこれこそが最も悲劇的かつ悪魔的な言辭と言うべきであろう。スメルジャコフの心に潜む測り知れぬ痛みと悲しみと孤独、そして怒りと怨念がここに明らかとなる。

自らの出生への痛みと悲しみ、そして自らが投げ込まれた運命の不条理と醜悪への怒りと怨念。ソフォクレスが描いたオイディプス王の苦悩から、シェイクスピア劇におけるアテネのタイモンやハムレットやリアの呻き、またアルツィバーシェフの主人公たちが発する呪い等々。スメルジャコフが発した呪詛の叫びと同類の言葉を古今東西の文学の内に求めれば、恐らく膨大なアンソロジーの編纂が可能となるであろう。だが我々は、今は飽くまでも聖書的磁場の内に留まり、スメルジャコフの言葉の検討を続けよう。これからも見てゆくように、スメルジャコフが内に蓄える聖書知識は並大抵のものではない。殊にここで彼が発した自らの生への呪詛の叫びとは、福音書のイエスに対して吐きかけられた唾、神に向かって翻された叛旗と考えることで初めて、そこに含まれる悲しみと怨念は最も明瞭に、その悲劇性と悪魔性を浮かび上がらせるように思われる。第6章で見るのだが、アリョーシャは自らが編纂した小冊子「ゾシマ伝」において、師ゾシマの言葉を用い、このスメルジャコフの心を「神と生命への呪い」と表現することも、ここで記憶に留めておこう(六3D)。

ユダとスメルジャコフ

ところでマルコ福音書の中には、この言葉が発するスメルジャコフが自らの運命と重ね、胸の痛みと共に対峙した、あるいは対決をしたと考える時、最も鮮やかにその悲劇的色彩を浮かび上がらせると思われるイエスの言葉が存在する。十字架に自分を売り渡したユダに対して、また間もなく自分を棄てて逃げ去ってゆく弟子たちに対して、イエスが発したとされる次のような言葉である。

「然れど人の子を売る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを」
(マルコ十四21)

マルコ福音書第十一章から第十六章にわたって記される「受難史」。その文脈の中で、まずこの言葉の位置を確認しておこう。

エルサレム入城(十一1・11)の後、イエスと敵対勢力との間には急速に緊張が高まってゆく。過越祭と除酵祭が迫り、イエス殺害計画を立てられる中(十四1・2)、祭司長たちの前に一人の弟子が現れ、師イエスの「引き渡し」を申し出る。ユダである(同10)。動機は定かでない。祭司長たちは喜び、ユダに銀貨の付与が約束される。その後のユダについてマルコは、彼が「如何にしてか機好くイエスを付さんと謀る」(同11)と記す。そして最後の晩餐。イエスは告げる。「まことに汝らに告ぐ。我と共に食する汝らの中の一人、われを売らん」(同18)。文脈からその「一人」がユダであることは明らかなだ。だがマル

コによれば、「弟子たち愛ひて一人一人《われなるか》と言ひ出でし」(同19)。マルコにとり、師イエスを売り渡すのはユダ一人でない。誰もがその可能性の中にいるのだ。この弟子たちに向かい、続いてイエスが発する言葉は悲痛この上ない。「然れど人の子を売る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを」(同21)。

スメルジャコフが念頭に置いていたのは、正にこのイエスの言葉だったのではなかろうか。改めて二人の言葉を、マルコは口語訳で、並べてみよう。

「しかし禍だ、人の子を売り渡すその人は。その者にとっては、生まれて来なかった方がましだったろうに」(マルコ十四21,岩波書店新約聖書翻訳委員会、佐藤訳)
 「この世にまるっきり生まれて来ないで済むのだったら、私はまだ胎内にいるうちに自殺してしまいたかったです」(『カラマーゾフの兄弟』五2,芦川訳)

この地上に人間が生まれることの意味を問う、千九百年近くの隔絶を挟んだ、恐るべき対話と言うべきか、対決・応酬と言うべきか。ここには新約聖書のイエスの言葉を正面に置き、自らの生の意味について究極の否定的返答を投げ返すスメルジャコフがいると考えられる。

イエスの言葉の二重性

イエスとスメルジャコフの言葉。ここに二人の時空を超えた対話・対決、あるいは応酬を読もうとする時、まず我々はイエスの言葉が持つ意味を「否定」と「肯定」、二つの方向で受け止めておく必要があるだろう。それら二つの意味に応じて、スメルジャコフの応答もまた違った意味合いで捉え得るからである。

まず「否定」の方向で取るとどうなるか。イエスの言葉は、ユダを始め次々と自分を裏切る人間たちへの、文字通りの激しい呪詛と弾劾の言葉となるであろう。この場合スメルジャコフの言葉は、イエスの呪詛と弾劾を文字通り正面から受け止め、逆にイエスと神に対して痛烈な呪詛と弾劾を投げ返すものとなり、その先には一人自死の道を選び取るスメルジャコフの姿が浮かび上がるであろう。イエスの側からの人間への呪詛。それを受けたスメルジャコフの側からの呪詛の投げ返しと、自らの生の否定。ここにあるのは福音書と『カラマーゾフの兄弟』が内包する否定性が極限にまで煮詰められた呪詛の応酬であり、そこから浮かび上がるのは悪魔性と悲劇性で塗りつぶされた闇の世界であり、またその闇の中に立つスメルジャコフの姿である。スメルジャコフがこのような徹底的「否定」の方向でイエスの言葉と対峙していた可能性も決して否定は出来ないのだ。この点は第6章で改めて検討しなければならない。

逆にイエスの言葉は「肯定」の方向でも受け取り得るだろう。つまりそれは弾劾と呪詛の言葉であるどころか、逆に、自分を裏切る人間たちに向けられた痛切な愛惜の表現、つまり人間への絶対愛から発せられたこの上なく激しい悲しみの表明とも取り得るであろう。

事実福音書記者マルコが記すのは、神を愛として捉え、あるいは神の愛に捕らえられ、その愛を十字架上の死に至るまで貫いたイエスの激しい生の姿である。この場合スメルジャコフの応答とは、自らを含む人間に向けられた「キリストの愛」に気づかずして、否、むしろ敢えてその愛を無視したまま、イエスに投げ返された生への呪詛と弾劾ということになる。つまり運命への復讐を父親殺しによって成し遂げようと謀るスメルジャコフとは、自分が産み落とされたこの地上世界における肯定的価値の一切を正面から拒否し、「キリストの愛」を含む一切の愛を拒み、「人の子を売り渡す」ことを選んだユダ・スメルジャコフなのだ。先の直線的「否定」よりも一層複雑な「否定」である。実際に我々が後の第6章で確認するのも、マリアやグレゴリーイやマルファやアリョーシャたち、自らを取り巻く「親切な人々」から注がれる愛に気づかずして、否、むしろ彼らの愛を斥けて、自らの生をひたすら「神と生命への呪い」に凝集させ、遂には裁きの神の前での自己処罰と自己清算を遂げるに至るスメルジャコフ、「自らの命を絶滅させる」その悲劇的な姿である。

だがここでも結論を急ぐことは止めよう。我々はこの後も第6章まで、この作品が内包するさまざまな「肯定と否定」の前に立ち、そこにある問題の検討を続けねばならない。

アリョーシャの「くしゃみ」

最後に、マリアとスメルジャコフの逢瀬の結末を見ておこう。

スメルジャコフがギターを爪弾きながら最後の一節を唄い出した時である。思いもかけなかったことが起こる。突然アリョーシャが「くしゃみ」をしてしまうのだ。恋人たちの密かな会話を、天使とも言うべき青年が立ち聞きしていたことが露呈する。だがここで我々が心に留めるべきは、天使アリョーシャの「くしゃみ」の滑稽さでも、恋人二人の前に出ることを余儀なくされた彼のバツの悪さでもない。決定的に重要なことは、スメルジャコフが自分の運命についてマリアに語った一切を、作者ドストエフスキイがアリョーシャの耳に入れさせたということ、しかもその事実を当の二人に「くしゃみ」によって知らせてしまったという事実である。

異母兄弟スメルジャコフの心の闇を知ったアリョーシャの中で、また彼に対するマリアの愛を知ったアリョーシャの中で、その後如何なることが展開してゆくのか、更にまた彼ら三人の間で今後如何なる交流が開始されることになるのか、これらについて筆者が直接記すことはまずない。だが我々はもう一度、本章の冒頭で取り上げた場面を思い起こそう。スメルジャコフの自殺を知ったマリアが、警察にも「誰にも知らせず」、「真つすぐ」「真つ先に」駆け付けたのは他の誰でもない、アリョーシャの許だったのである。

作者ドストエフスキイが直接書かずして、我々読者に読み取ることを迫ったドラマは少なくない。またそのヒントも多くはないが、皆無でもない。それらの検討を通してスメルジャコフに、マリアとアリョーシャに、そしてイワンやドミートリイに光を当て、彼らの抱える問題を考えることが、次回以降の我々の課題である。 (第1章 了)